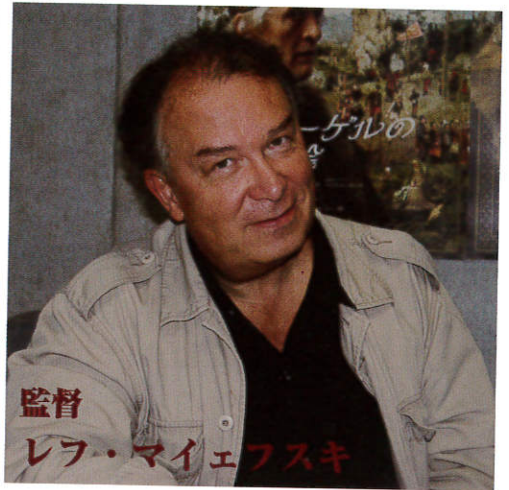


海外 からの お客様

Vol.2

16世紀フランドル絵画の巨匠ブリューゲルの、壮大な絵画の世界をめぐる旅を体感できるのが、映画「ブリューゲルの動く絵」です。まさに動く芸術作品。ブリューゲルの絵画に描かれた人たちがそのままの姿で動き出します。どんな暮らしをしていたのか、人々の関係性は…、それは本作の監督、レフ・マイエフスキ氏の完璧なるイマジネーションの再現でもあります。レネッサンス時代の芸術作品が、現代のコンピューターというツールを駆使して見事に甦りました。絵画の中の時間旅行を体感してみましょう。



監督
レフ・マイエフスキ

絵画を映画にしてしまおうという構想はいつごろからお持ちでしたか? 「若いころに、昔の絵を見ながら常に思っていました。意識の中でその絵の中に入っていくということを常にしていたんです。特にブリューゲルは誘い込まれる作品。ほかの絵画においては、ポーズをとっていたり、オフイス的な感じがします。でもブリューゲルの作品は、周りから見るとより人を押しつけてでも作品に入りたいという欲求に駆られるんです。」絵画の中でも、ブリューゲルの作品はたくさんの方が登場します。映画でいうならば群像劇といった感じでしょうか。監督は絵をご覧になったとき、その人たちの背景などを想像するのでしょうか? 「その通りです。その中を旅していくことになるわけですから。」本作は、絵画というテイストがとても守られています。背景は絵ですね。「背景の作り方はとても複雑でした。たくさん人の層があるんです。人はブルースクリーンにバックに撮影しました。それぞれのグループが別々に撮られています。本物を使って撮影しているものもあります。そして背景自体は7×20メートルのバックを自分でペイントして作りました。ブリューゲルの絵を描いたんです。」景色の中心だけで撮ることもできたと思うのですが、このような背景にこだわられたというのは? 「普通のやり方ではできなかったと思います。撮影の前にいくつかテストをしています。悪くはなかったのですが、普通のランドスケープを見つけて、衣装を着せて撮影をしたんです。でも、まったくブリューゲルに見えなかった。悪くはなかったのですが、普通に見えてしまったのです。それでブリューゲルの作品のいいディテールの複製をウィーンの美術館から取り寄せ、人を消していき、風景だけを見ていきました。そうしたら、7つの異なるパースを持つていたんです。そして、これを単一的な映像で再現することは無理だと考えたんです。ですから、別々のレイヤーを作っていく構成をしていくしかない気がしたんです。私たちは一つではなく二つの目を持つていて、そして空間の中で互いに干渉して三次元性を与えるわけです。ある空間に私たちが入ると、目は常に移動しているんなもの確認します。そして脳が陰影を伴う画像をうみだしていく。ブリューゲルが絵画の中でやっていたのはこういうこと。しかし映画はレンズを使う。目の生きた視点を映画でもたらすことはできない。ですから、スライスしていったその深さを足していくことでブリューゲルの世界を再現しようとしたんです。」作品の中で一番こだわりのある場面はどこですか? 「一番時間がかかったのが映画の真ん中で、風車が止まる場所です。あのシーンだけで1年かかっています。衣装も大変でした。テキストイルも100枚サンプルを作ったカメラの前で確認しました。そして同時に染めていくのです。野菜や果物で染めたりしました。農村地帯から、女性を40人集めて、手で縫ってもらったのです。」では、最後に作品をご覧になる皆さんにメッセージをお願いします。「映画そのものがメッセージです。」

巨匠ブリューゲルの、
壮大な絵画の世界をめぐる旅

ブリューゲルの動く絵

12.17 (土) 渋谷・ユーロスペースほか
全国順次ロードショー

ブリューゲルの絵が動く! ブリューゲルの名画《十字架を担うキリスト》の中に入り込み、フランドル絵画の世界を旅するような体感型アートムービーです。ルトガー・ハウアー演じる画家ブリューゲルをガイド役に、描かれた人々の日常生活をなぞり、名画に秘められた意味を解き明かしていく。風車の回る音と壮麗な天地が奏でる音響に包まれながら、16世紀フランドルと聖書の物語が入り混じった壮大な絵画の世界を体験できます。

出演: ルトガー・ハウアー、シャーロット・ランプリング、マイケル・ヨーク 他/監督: レフ・マイエフスキ/ポーランド・スウェーデン/上映時間: 96分/PG-12/配給: ユーロスペース、ブロードメディア・スタジオ/© 2010, Angelus Silesius, TVP S.A